



「小さな親切」運動鹿児島県本部賞

「ありがとう」を伝える勇氣

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校 一年

道宮 空子

私の家の近所にあるゴミステーションは、いつも綺麗だ。だからといって特別な場所ではなく、昔ながらの緑色のカラスよけの網だけがある、そんな平凡なゴミステーションである。

ゴミステーションの周りというのは、少し臭いがしてカラスや猫が集まっているイメージがあると思うが、このゴミステーションはそうではない。いや、そうではなくったと言ったほうが正しいのかもしれない。

私にとって通学路にあったゴミステーションの近くを通ることは、少し怖い思いをする場所だった。なぜなら、そこは大量のゴミで溢れ、漆黒のカラスが鳴き、辺りには異臭が漂う場所だったからである。しかし、ここを通らなければならぬ。私はゴミステーションの反対側を急いで走り過ぎるようにしていた。私にとっては大嫌いな場所だった。

そんなゴミステーションが変化し始めたのは、中学生になった頃だった。辺りに散らばっていたゴミがなくなると、異臭もしなくなっていた。ゴミステーションの周囲の雰囲気ガラリと変わった。たまたまだろうと思っただけ、次の週も、その次の週も、そこはキレイだった。

「あそここのゴミステーションさ、最近すごくキレイになったよね。」夕食

をとっていたとき、兄がそう言った。

「どうして、急にキレイになったんだろう。」そう私が呟くと、父が、「誰かが掃除をしてくれているんだろうね。」と言った。一体、誰なんだろう……私はその人物にとっても興味をもった。

ある日、私は下校途中、ゴミステーションに人影を見た。不思議に思っただけで近づいてみると、その人影の主は、顔見知りの近所のおじさんだった。おじさんは汗びっしょりになってゴミステーションの掃除をしていた。ゴミステーションをキレイにしてくれたのは、この人だったんだ……私はその姿を見て胸が熱くなった。

「いつもありがとうございます。」と、声をかけた、感謝を伝えたい。そんな思いとは裏腹に、私はその場を無言で通り過ぎてしまう。そのおじさんとは一度も話したことがなく、そのときの私には声を発する勇氣が出なかった。悔しかった。季節が変わってもゴミステーションはキレイなまま、一方で感謝を伝えられないもどかしさが募るばかり……。

見えないところで地域や周辺住民のために、汗を流しながら掃除をしてくれていたおじさんの姿。ゴミステーションがキレイになったことで、住民のゴミの出し方に対する意識が変わった。ゴミが網から出ないようにしたり、きちんと分別をしたりしている。この地域のゴミ出しに対する意識がよい方向へと変わったのは、おじさんのおかげだ。

「こんにちは。いつもありがとうございます。」緊張しつつもそう言葉にすることができたのは、卒業式の前日だった。

「こんにちは。こちらこそありがとうございます。」おじさんはニコッと微笑んでくれた。やっと言えた……勇氣を出して感謝の思いを伝えることができた。私の心は青空のように温かく晴れ渡り、桜の花びらのように舞い上がる思いだった。

高校生となった現在、おじさんの姿を見かけることはないが、相変わらずキレイなゴミステーションを見る度に、おじさんの笑顔を思い出す。だから今はゴミステーションを通る時に、「ありがとう」と感謝を伝えることにしている。この場所が好きになった……。



【審査評】

ゴミステーションの掃除を続けていたおじさんの実践が、地域の方々
ゴミ捨てに対する意識を変化させることに繋がりました。そうした人々の意
識の変化を、登下校時にゴミステーションの変化を見ていた自分の心情と重
ね合わせることで、その移ろいとうまく結び付けて表現することができてい
ます。自分の経験をもとに、思ったことや感じたことを一つ一つ丁寧に叙述
していく「作文」として典型的な作品になっています。